戦前のアメリカ伝道と日系移民社会 ②

おやさと研究所研究員
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

日系移民と日系宗教

前号では、アメリカ本土への日本人移民の開始と定住、また日本人の土地所有や渡航を制限する法制度について簡単に述べた。今号では天理教が布教活動を開始した頃の日系移民社会における宗教文化はどのようなものであったかを見てみることにする。まず日系移民研究における宗教という点から少し考えたい。

他国へ渡った人々が新しい社会での生活や異なる文化へどのように適応するかを考える上で、宗教は欠かすことのできない要素である。海外へ渡った日本の宗教に関する研究は、日本において 1980 年代から盛んになったとされている。尚、日本で生まれ海外に渡り定着した宗教は「日系宗教」と称されることが多い。本稿においてもこの意味において日系宗教という言葉を使用する。

日本の宗教の国外における伝道活動は、日本人の移民活動に呼応する形で始まっているが、アメリカにおいても、移民が盛んになった 19 世紀後半に組織的な伝道が開始されている。井上順孝は、ハワイやアメリカ西海岸での日系宗教の伝道の歴史から、日系宗教教団を大きく３つのグループに分類している。まず１つ目は日本人のアメリカへの移民が本格化した 1900 年頃に、その後を追う形で活動を開始した仏教各宗派や神道教団。２つ目は日本人移民がアメリカ社会へ定着し、ある程度の安定を見せた時期に活動を開始した「古手の」新宗教や小さな仏教集団。そして３つ目は戦後、特に 1950 年代以降に海外布教を開始した教団で、主として新宗教。この分類では天理教は２つ目の宗教集団に属するとされている 。

また日系宗教の研究において、布教形態や組織形態の特徴をあらわすものとして様々な分類が考えられている。布教先の地域性を考慮した「移民依存タイプ」、「国策依存タイプ」、「無基盤タイプ」という分類、布教の対象に関して、布教地に在住する日本人や日系人の場合を「海外出張型」、非日系人を対象にする場合を「多国籍型」とする分類、布教師の現地への定住にもとづく「移住型」、布教師と信者の関係を考慮した「おやこ型」、「中央集権型」などの様々な視点からの分類が検討されている。戦前のアメリカ本土での天理教の布教活動をこれらの分類からみると、その展開の基盤は既存の日系移民社会であったため、布教先の地域性という点では「移民依存タイプ」と考えられる。また布教の対象は「多国籍型」を目指しつつも実際にはほとんどの場合「海外出張型」であり、布教師は定住を前提とした「移住型」であったと言えるだろう。そして組織形態は教会系統に重きをおいた「おやこ型」を基盤とし、アメリカ伝道庁設置以後は地域内の横のつながりを意識した「中央集権型」も模索していた。

日本人キリスト教会と仏教会

次に戦前のアメリカ本土の日系移民社会において主要な教団であった日本人キリスト教会と仏教の伝道初期の様子について見ていく。移民がホスト社会に適応し安定した移民社会を形成する上で宗教の果たす役割は少なくない。ハワイの日本人の場合、仏教と神道がその役割を担ったとされるが、アメリカ本土においては、日系移民社会形成の上に、日本人キリスト教会と仏教各派が大きな役割を果たしている。

アメリカ本土における日本人キリスト教会の伝道は、在米日本人によるサンフランシスコ福音会の活動が嚆矢とされ、1877 年に最初の団体福音会が同地に設立されている。その後メソジスト教会、長老派教会、会衆派教会へと分裂しているが、各教会は矯風、教育、職業斡旋など多岐にわたる活動を展開していた。

初期の日本人移民の多くは書生か出稼ぎ労働者であった。彼らの目的は、何か新しい知識や技術を身につけること、あるいは出来るだけ多くのお金を稼いで日本に帰ることであった。そのためには英語が出来るようになる、良い仕事をみつける、真面目に生活することなどが不可欠であると考えられた。日本人キリスト教会は、白人家庭に書生を紹介したり、クリスチャンが経営する職場へ労働者を斡旋したりした。また土地法や移民法の改正により日本人たちが定住を考え始めると、女性や子供を視野に入れた活動も活発化してくる。こうして教会では宗教活動のほかに、英語学校、寄宿舎、幼稚園、バザーなど様々な活動を提供し、日本人たちを物心両面でサポートしようとしたのである。

一方、仏教は日本人キリスト教会に少し遅れて伝道を開始している。1893 年に万国宗教大会がシカゴで開催され、日本の仏教界から真言宗、天台宗、臨済宗、浄土真宗の各派の代表者が出席した。これが一つの契機となり、浄土真宗により 1898 年サンフランシスコに桑港仏教会が設立された。その後、日本人移民の居住地を反映して、西海岸のサクラメント、フレスノ、ポートランド、ロサンゼルスなどの各地に次々と仏教会が設立されている。こうして教会が次々と設立されていった背景としては、劣悪な環境での苛酷な出稼ぎ生活において宗教的欲求が徐々に高まっていったことが挙げられる。日常の生活において宗教的儀礼や習俗が必要とされ、また不慮の事故や病気で亡くなる人もいたことから葬儀のための僧侶も必要であると考えられたのである。そこで、日本国内と同様に、葬儀、年忌法要、先祖祭祀などが仏教各派の初期の主な活動とされた。

こうして、アメリカ本土の日系移民社会において、西本願寺を筆頭とした仏教各派、日本人キリスト教会がその宗教文化を担っていたのである。また 1924 年の移民法制定以降、日本人たちの定住傾向が高まり、移民社会がある程度安定して来るにつれて、アメリカで生まれた子供である２世たちの教育が、日系移民社会において大きな関心事となった。キリスト教会や仏教会もこの問題に積極的に対応していった。仏教系の学校は、２世たちを日本人として教育するため、日本的な道徳や習慣、考え方などを教育する場所を提供した。一方、キリスト教会は、アメリカの学校に通うようになった２世たちに、アメリカ社会の根底をなすキリスト教文化の中でより良い生活を送るための指導、支援の場を提供することになった。こうして仏教会と日本人キリスト教会はあらゆる面で競争することになったのである。

［参考文献］
同志社大学人文科学研究所「海外移民とキリスト教会」研究会編『北米日本人キリスト教運動史』PMC 出版、1991 年。
井上順孝『海を渡った日本宗教―移民社会の内と外』弘文堂、1985 年。
在米日本人会事蹟保存部編纂『在米日本人史』復刻版、PMC 出版、1984 年。